

追悼号を編むにあたって

前会長 橋 口 晋 作

今回、人文学会で昨年八月二十六日に亡くなられた故奥村恒哉教授の追悼号を編むことになった。

先生が本学文科国文専攻の教授として着任されたのは昭和五十二年四月のことである。当時、国文専攻は文科の専攻分離を控えながら、中国文学に塩谷充夫教授、国文学に福井迪子助教授と講師として着任二年目の筆者という陣容であった。この為、学内で、新任の教授は国語学を担当するばかりでなく、国文学も後援出来る人が望ましいという声が強く、塩谷先生、福井先生が人選に苦慮されたと聞いている。幸い福井先生が先生と共通の師であられた（学校は異なるが）大坪併治先生から先生のことを聞いて来られ、それが御縁で本学にいらっしゃることになったのではなかったかと思う。

家政科に一年遅れたが、先生において頂いた御蔭で文科も目出度く専攻分離が認められた。又、鹿児島大学の国語学、国文学関係の先生方と研究会（国語国文学談話会）をもつことになったのも、先生がいらっしゃったことが機縁であった様に思う。

先生は昭和五十七年一月に『古今集の研究』で文学博士の学位をお取り

になった。業績一覧を見れば分かるように、亡くなられる直前まで大変な御仕事振りである。御不自由なお体で次々と著書や論文を書いて行かれるのは正に驚異であった。筆者も、先生の研究者としての御姿に大きな啓発を受けた一人である。

本学に來られてからは歌枕の研究が先生の御研究の大きな部分を占めて居られた様に思う。御体が御不自由でなければ、もっと広く実地踏査などもなされたに違いない。その点で、筆者等至らぬ処が多々あったのではと悔んでいる。

ここに、先生の学恩に報いる為に、ささやかながら関係者が論文を出しあった。泉下の先生に御笑覧を乞い、先生の御冥福をお祈りするものである。